



TITLE:

静脩 Vol. 19 No. 3 (1982.12) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 19 No. 3 (1982.12) [全文]. 静脩 1982, 19(3)

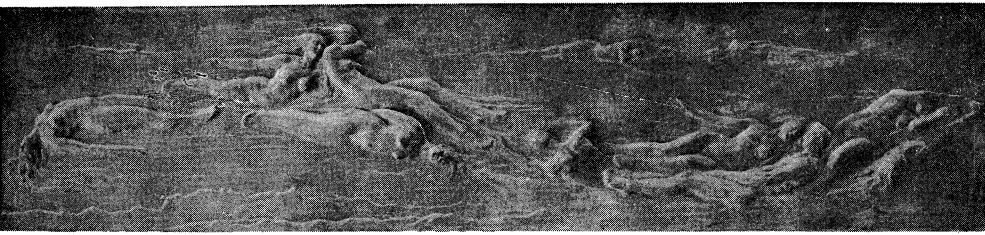
ISSUE DATE:

1982-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65976>

RIGHT:



静脩

1982年12月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 19, No. 3

情報の収集と交流：雑感

医学部教授 小 川 和 朗

去る10月、ドイツ民主共和国（いわゆる東ドイツ）ライプツヒ大学のルッパ（H. Lupp）教授に招かれて、ハレ（Halle）で開催された学会に出席し、学会の前後に、ライプツヒ（Leipzig）、イエーナ（Jena）、ワイマール（Weimar）などの都市を見学する機会を得た。ライプツヒは数百年に亘り継続されている、春秋年二回のライプツヒメッセ（見本市）で有名な産業都市であり、ライプツヒ大学は、1409年に設立され、ヨーロッパではチェコスロバキヤのプラハ大学に次いで古い由緒ある大学である。1953年以来、ライプツヒ・カルルマルクス大学とよばれている。この大学では、ハイゼンベルグ（W. K. Heisenberg）やオストヴァルト（F. W. Ostwald）が教鞭をとり、ゲーテ（J. W. von Goethe）、シューマン（R. Schumann）、ワーグナー（R. Wagner）などが学んでいる。解剖では、我々が学生の時に用いた名著「人体解剖アトラス（Handatlas der Anatomie und Menschen）」を書かれたスパルテホルツ（W. Spalteholz）教授がおられた大学である。ゲーテといえば、ライプツヒの町の中心部には、ゲーテが学生時代よく通い、ファウスト（Faust）を書いた時のモデルとなったアウエルバッハスケラー（Auerbachs Keller）といわれる地下レストランがあり、そのケラーにはファウストからのいろいろな場面が壁画になっており、雰囲気醸し出している。ワイマールには、ゲーテが長年住んで

いた住居や別荘があり、イエーナ大学解剖学教室にはゲーテが顎間骨（Zwischenkiefer）の比較解剖学的研究に用いた標本がそのまま展示されている。この度の旅行で始めて知ったが、シラー（F. Schiller）はイエーナ大学解剖学教室で数年間、解剖助手をしていたそうである。因みにイエーナ大学は、今、イエーナ・フリードリッヒシラー大学とよばれている。

これらの都市を廻り、ゲーテ、シラーを始め、バッハ（J. S. Bach）、ヘンデル（G. F. Händel）など、平素よく耳にし、あるいは目にする数多くの偉人の生活に直結した足跡に肌で触れると、この地方の歴史、文化の底深さをひしひしと感じた。中でも、ルッパ教授に案内されライプツヒのドイツプラザにあるドイツ図書館（Deutsche Bücherei）を訪問した時にはその気宇の壮大さに感服せざるを得なかった。このドイツ図書館は建築学的にも興味深い建物のようなのであるが（図1, 2）、1912年9月25日に設立され、ドイツ語で書かれた凡ての資料を収集することを目的とした、特徴ある図書館である。その目的の壮大さには驚かされる。ライプツヒ大学附属図書館は全く別であり、ドイツ図書館はライプツヒ大学とは直接の関係はない。ドイツ図書館には1980年12月31日現在で7,056,257点の資料があり、毎年約30万点づつ増えているようである。旧館（図1、図2の右側）と新館（図2の左側）からなり、旧館と新館の間



図1 ドイツ図書館（ライプツヒツ：『本の町』ともいわれている）正面玄関

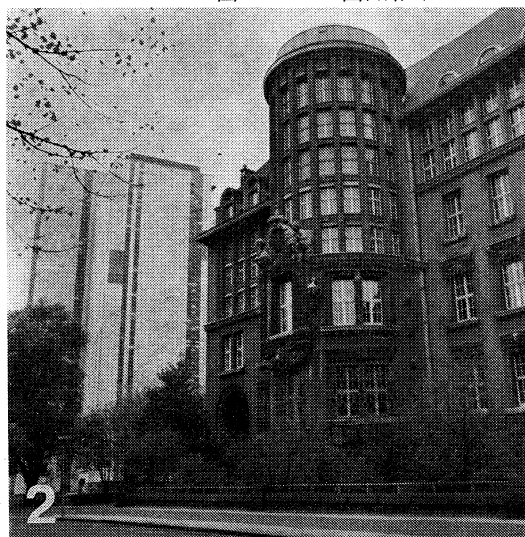


図2 旧館（右側）と新館（左側奥）

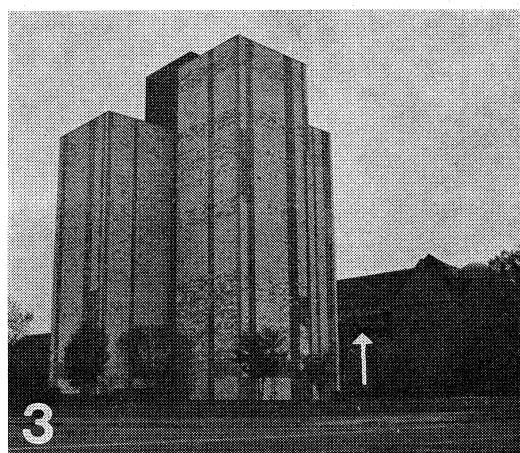


図3 新館（左側手前）と旧館（右側）の間にある、自動的に資料を輸送するチューブ（矢印）に注意

には、書籍などを自動的に輸送するチューブ（図3矢印）がある。

ある図書館ないし情報センターで情報の収集を目指す場合、どこにでもあるような情報を万遍なく収集することにも意味があるかも知れないが、何か特定の目的をもって情報を収集し、ある情報に関してはそこに行けば何でも得られるという、『特徴ある、ユニークな情報センター』を作ること極めて有意義なことであろう。

ドイツ図書館は勿論国費で賄われているのであ

ろうが、ドイツ語で書かれた凡ての書籍、楽譜、手写本、フィルムなどを収集するには相当の経費が必要なことであろう。本年前半に、ある国の教授より書信があり、国家的な外貨不足のために外国からの書籍、雑誌、研究用試薬など一切の購入が全面的に不可能になり、情報の収集と交流に極度の不便を来し、研究上にも支障を来しているということであった。一国の経済状態はあらゆる面に影響を及ぼすのである。研究を遂行するためには2つの欠くべからざる要素、すなわち、

idea と money, が必要であるといわれている。特徴ある情報センターを確立する上でもこの2つの

要素は必須なのであろう。日本経済の正常な発展を祈って止まない次第である。

「東洋学文献類目」編集作業の電算化について

人文科学研究所附属東洋学文献センター

都築 澄子・志水喜久子

1. 「東洋学文献類目」の編集方針

人文科学研究所附属東洋学文献センターでは、研究所で受け入れた図書及び雑誌所収論文の中から中国を中心とした東洋学に関連するものを選別、分類・編集し毎年1冊の冊子として発行している。これは、昭和9年より「東洋史研究文献類目」として発行され、昭和36・37年は「東洋学研究文献類目」、さらに昭和38年からは「東洋学文献類目」（以下「類目」と略す。なお、この年から採録年表記を西暦に変えた。）と改題し、現在に至っており、広く国内外の東洋学研究者の利用に供している。

その構成は日本・中国・朝鮮文篇と欧文篇にわかれ、それぞれは論文の部と単行本の部からなっており、巻末に人名索引を付している。分類は「類目」独自のものを使い、採録範囲は、地理的には、中国を中心として東は朝鮮、南は東南アジアからインド、パキスタンまで、西は中央アジア、北はモンゴルまでとするが、中国との関連において多少の伸縮がある。また、文献的には1976年版から研究所に受け入れする図書・雑誌からの採録を原則としている。もっともこの原則は刊行当初からそうなのであって、「類目」はもともと所蔵文献目録として始まったのである。所蔵目録の範囲を超えて総合目録の性格を有するようになったのは、昭和26・27年版からのことで、1976年版から当初の原則にもどそうとしているのであるが、ただ和書の単行本に関しては、便宜を考え出版年鑑等から補って編集している。欧文篇は雑誌所載の書評論文によって過去5年間までに発行された図書の書評を採録するので、原本がなくて書評だけが採録されるケースが極めて多い。つまり、日本・中国・朝鮮文篇では雑誌論文が主体で

あり、欧文篇では単行本の部の書評論文が主なのが本誌の特徴なのである。

表1

採録タイトル数の推移

年		1976	1977	1978	1979	1980
日本・中国・朝鮮文	論文	4211	3408	4342	8714	10133
	単行本	623	544	745	738	976
欧文	論文	757	659	812	963	903
	単行本	956	888	826	1079	1034

採録誌数の推移

年		1976	1977	1978	1979	1980
和雑誌		330	350	356	363	376
中国雑誌		53	43	79	158	175
朝鮮雑誌		13	14	15	24	18
論集		13	8	11	22	45
小計		409	415	461	567	614
欧文雑誌		78	77	85	98	95
計		487	492	546	665	709

最近における採録数の推移は、別表1の通りであるが、特に中国雑誌及び単行本の数、中国における文化大革命終焉後の活発な出版活動を反映して、特に1978年から1979年にかけて論文数が急激な伸びを示している。採録数が増えると編集に手がとられるし、印刷にも面倒が増える。こうした傾向は1976年版編集当時からすでに顕著になっていたもので、先に述べたように採録誌を研究所所蔵のものに限ったり、採録基準を厳しくしたりして対応策を講じたけれども、「類目」の発行が毎年約1ヶ月ずつ遅れるという事態が続いた。「類

目」編集担当者が2名から4名に増えている現況下でも数年後には年度内刊行が難しいという判断が生じ、これが「類目」編集の電算化を進める上での一つの大きな動機となった。

その他には、もちろん利用者側から資料検索を即時に（現在、図書の発行から「類目」の刊行まで2年3ヶ月から3年3ヶ月程かかるため、これの短縮）、大量に、あるいは系統的に、さらにはより様々な角度からできないものか等々の要求が常々あり、これに応じて「東洋学著作目録集成」なども部分的には作られてきたけれども、こうした事柄が比較的容易にできる見通しがついたことも、電算化の試みが進められていった要因の一つである。

2. 電算化の経過

電算化の経過は以下の通りである。「類目」電算化のための検討作業が私達のレベルで始まったのは1981年7月末であった。それ以前から技術的な検討と準備が、本学の大型計算機センターの星野聰（現図書館情報大学）、当センターの勝村哲也両氏の間で進められていたのであるが、ここに至って現行の「類目」を分析し、電算化のための新しい書式（フォーマット）を作成することとなったのである。その後、新しい「類目」の体裁、書式等の基本設計ができあがるまでにほぼ2ヶ月かかり、それと平行して旧来の分類を計算機によって統一的に処理するための手直しを加え、日本・中国・朝鮮文篇と欧文篇共通の分類表を作成した。これを所内の類目委員会でいろいろと修正していただき、10月始め頃から新しい方式で実際にデータの採録を開始した。試作カードによる計算機への入力作業は外注し、校正を経て納品された磁気テープを基に、大型計算機センターの開発計画（代表者星野聰氏）によってデータベース化が試みられたのである。それに伴い、1982年5・6月にこれまでの仕事を総括してデータベース化のための仕様書を作成した。7月にデータベース化、8月に冊子体目録作成のための手順が完成、こうしてようやく文献採録から電算機による冊子体目録の編集という一サイクルの作業が試験的に成功をみたのである。

今後私達はひきつづき次々と採録しているデータの入力作業を続けつつ、その都度出て来る問題を解決してゆき、より完全なデータベースの作成に力を注ぎたいと考えている。データベースから冊子体目録の編集、さらに印刷に至る過程には、まだまだ困難な部分があるとはいえ、新しい技術を尽くして編成される1981年版の「類目」が無事刊行されるよう願っている。

3. 書式の概要

「類目」の書式は1.で述べた編集方針によって決定的に方向づけられる。つまり、(1)先ず採録範囲にかかわるものとして、日本・中国・朝鮮文と欧文を扱うこと、(2)論文と単行本の両方を扱うこと、(3)単行本に書評を付載することが要求される。次に排列にかかわるものとして、分類項目の内部を①地域、②時代、③事項、④内容等によって、著者索引を①五十音、②画数、③アルファベット等によって、従来からの慣行に従って排列する必要がある。こうした要請をふまえて書式を作成したのである。

少し具体的に説明しよう。「類目」は論文篇、単行本篇とも内容にいろいろな形態のものを含んでおり複雑な構成になっている。論文篇は雑誌論文と論文集中の論文よりなるが、それらの中には大きなテーマの下にいくつかの論文がまとめられているもの、論文を批評した論文などがある。単行本篇は単行本とその書評論文からなっているが、書評の場合、同一単行本が多数の雑誌上で異った評者によって評されており、それが何年かにわたって現われることが多い。さらに多巻物が評されている場合、シリーズ全体として評されることもあれば、各巻毎に評されることもあるので、記載事項に統一がとれにくい。その他特に欧文の場合、数年にわたって見直しをしなければならないこともある。このような状態を分析した上で、JAPAN/MARC, UNIMARCより複雑な処理を要する新しい書式を作っていた。

この電算化の書式のあらましは別表2の通りであるが、論文篇は雑誌カード①といくつかの所収論文カード②の組み合わせからなり、さらに大きなテーマの中で複数論文がある場合、子目カード

表2 東洋学文献類目電算化のためのフォーマット

() 外は和中文, () 内は欧文

① 雑誌カード 作業年度 事務番号

010	A (C)	□□ △△△△
020 (021)	\$j	\$k \$g
	\$d	
030 (031)	\$i	\$n

④ 書評論文のカード

200 (201)	○○○○○	
	\$r \$f \$z \$n	
	\$p	
	\$l B □□△△△△	
	(D)	
	\$w	

批評された単行本の
コントロール番号

⑤ 単行本カード

510	B (D)	□□△△△△
520 (521)	\$t	\$u
530	\$a	\$f \$z
	\$n	
540 (541)	\$e \$d	\$v \$p
	\$h	\$s
550 (551)	\$m	
	\$b \$c	(又は\$x \$y)
560	\$q	

② 論文カード 論文番号

100 (101)	○○○○○	
	\$t \$u	
	\$a \$f \$z \$n	
	\$p \$m	
	\$b \$c	(又は\$x \$y)
	\$q	

⑥ 批評論文カード

300 (301)	○○○○○	
	\$r \$f \$z \$n	
	\$p	
	\$l A □□△△△△○○○○○	
	(C)	

批評された論文の
コントロール番号

⑤' 多巻物の場合の全体の
タイトルのカード

510	B (D)	□□△△△△
520 (521)	\$t	\$u
	\$a	\$f \$z
530	\$n	

③ 子目論文カード

110 (111)	○○○○○	
	\$t \$u	
	\$a \$f \$z \$n	
	\$p \$m	

⑦ 多巻物の場合の各巻の
単行本カード

510	B (D)	□□△△△△
520 (521)		
530		
540 (541)	⑤と同様	
550 (551)		
560		
570	\$l B (D)	□□△△△△

全体のタイトルのコントロール番号

フィールド一覧

フィールド名	内 容
BANGO	コントロール番号
A, A ₁	著者名 (漢字)
A ₂	著者名 (EBCDIC)
B, B ₁	分類コードとその漢字表記
C	排列のための手がかり (地域・時代・事項・内容)
C ₁ , C ₂	地域コードとその漢字表記
N ₃ , N ₄	時代コード (上, 下限)
C ₇	事項コード
C ₈	内容コード
D	出版年 (月)
E	出版社 // 出版地 (漢字)
E ₂ , E ₃	同上 (EBCDIC)
F	著者名 (カナ)
G	号
H	規格
I	巻, 号の注記
J	雑誌名

フィールド名	内 容
K	巻
L	リンク番号
M	ページの注記
N	雑誌・著者の注記
O	階層コード
P	ページ
Q	手がかり要語
R, R ₁	評者
S	叢書名
T, T ₁	表題 (漢字)
T ₂	表題 (EBCDIC)
U, U ₁	副書名 (漢字)
V	巻数
W	書評についての注記
X, X ₁	学者名 (漢字)
Y	学者名の排列種別
Z	著者名の排列種別

③をもつ時もある。論文を批評した論文である場合は⑥のカードを用い、批評された論文のカード②との間をリンク番号でつなぐ。単行本篇は単行本カード⑤と多巻物の場合の各巻のカード⑦からなっている。多巻物の処理については、採録カード数は多くなるが、検索に便利のように1巻1カードとし、大タイトルと各巻タイトルとの間はリンク番号を使って自動的に結びつくようにした。書評の場合は論文篇の中に書評論文のカード④があり、単行本篇の中にある書評された単行本のカード⑤との間はリンク番号でつながるようになっている。

データの採録用には、当初新形態の用紙を考えていたが、使い慣れていることから今のところは旧来のカードを使用している。この方式の問題点は1枚のカードではデータ事項が書ききれないことが多いことである。現在は2枚以上にわたったカードをゴムバンドでたばねているが、ゴムバンドはカード巾が厚くなることと、切れやすいこともあり、より適切なデータシートを今後も検討していかなければならない。

項目名の中で特徴的なことは、\$Cに同一分類内の排列順序を明らかにするために、[地域コード][時代コード][事項コード][内容コード]の4種のコードをもたせたことである。各コードの内容はあらかじめ決定しておき、定義ファイルとして入力されている。排列の方法はこれまでの「類目」の基本原則、地域(国)別に並べた後にその中を時代順にという原則に従い、\$Cの4種のコード順に並べられる。さらに時代コードの中は、A概論または通史あるいは古代から現代までの大まかな区分、B王朝毎の区分、C西暦年、D世紀、と4種のわけ方にわかれており、このいずれかを用いることになっているので、地域毎にA B C Dすべてを西暦年で機械的に表わせるようにあらかじめ定義づけ、その順番に従って排列することになっている。この排列規則には分類項目によっては例外があり、一部分は著者索引の排列順や記述されている東洋学者の排列順に、また他の一部分ではあらかじめ決められた事項コードの順によって排列されるというように、一見複雑なも

のとなっている。しかしこれは、排列にあたってできるだけプログラムによる機械的な処理部分を増やそうとした結果である。

もう一つの項目としての特徴は、将来シソーラス(検索語辞典)のようなものを作ることを予想して、\$qに内容を説明する文章や単語を手がかりの要語として書き込み、\$nには雑誌や著者の注記をつけ加えたことである。これは冊子体に編集する際に著者索引で→ヲミヨ項目を入れたりすることが可能となると考えたからでもある。

4. 問題点と今後の課題

電算化の結果、実務者にとって目に見えて利点となったことは、最終編集段階でこれまでかけていた、排列、ナンバリング、コピー等の膨大な労力が一切省かれるということであるが、それにかわって各カードを作成する時に分類、排列コードの決定に十分な検討が必要であり、索引排列のために日本人名のよみを調べてつけることや、データ入力の外注先からもどってきたリストの校正、データベース作成時の校正、冊子体に打ち出す時の手直しなど新しく加わった作業も多い。まだまだ検討事項も多く作業にも慣れていない上、近くに端末機やワードプロセッサ等がないこともあり、電算化が即作業能率のアップにはつながっておらず、これが軌道に乗って実際に効果を発揮するにはまだまだ年月がかかるものと思われる。

全体としてこの電算化にあたっては、これまでの「類目」でとられてきた編集方針やスタイルを踏襲して、できるだけそのままの形で冊子となるように考えたので、データベースから冊子体目録へ編成していく過程が計算機処理上大変複雑なものとなった。先に述べたようにこの作業は、最近一応のプログラム処理ができるようになったものであって、この過程で検討されるべき問題はまだ山積している。字種の選定や印刷形式の設定なども今後の課題である。

データシートの採録例

- i) 510 D810115
521 St Principle and practicality: Essays in Neo-Confucianism and practical learning. Sa De Bary, Wm. Theodore/Bloom, Irene//ed.
Sz 44
541 Se Columbia Univ. Pr. // N. Y.
Sd 1979
Sp 18, 537
Sb 081X
Sc 10A0XX1
Sc { 10 地域コード 東アジアを表わす
AO 時代コード 概論を表わす
XX 事項コード 空欄を表わす
1 内容コード 一般論文を表わす

- ii) 510 D810037
521 St The Chinese experience. (History of Civilisation.) Sa Dawson, Raymond
Sz 4
541 Se Weidenfield & Nicolson//London
Sd 1978
Sp 25, 318
Sm 24 pls.
560 Sb 013X
Sc 11 A1 XX1

- iii) 010 C810008
021 Sj BSOAS.
Sk 44
Sg 1
Sd 1981

- 101 00004
St The Mongol Expire: A review article.
Sa Morgan, D. O. Sz 4
Sp 120-125
Sb 013X
Sc 11B270EXX4

- iv) 010 A810087
020 Sj 名古屋大学文学部研究論集
Sk 80
Sd 1981 (3)
030 Si 史学 27

- 100 00002
St 十七世紀初頭の「織備の変」をめぐる二、三の資料について
Sa 森正夫 Sf モリ マサオ
Sz 1
Sp 107-128
Sb 013X
Sc 11D+17GXX1
Sq 氏変, 絹織物製造賃労働者
Sc { 11 地域コード 中国を表わす
D+17G 時代コード 17世紀初
XX 事項コード を表わす
1 内容コード

- v) 010 A810061
020 Sj 三康文化研究所所報 \$k 16
Sd 1981 (3)

- 100 00001
St 古代朝鮮文化と日本文化とに見られる共通性と異質性
Sa 斎藤忠 Sf サイトウ タダシ
Sz 1
Sp 1-21
Sb 0141
Sc 16A2XX1

- vi) 510 B810065
520 St 古代朝鮮文化と日本
Sa 斎藤忠 Sf サイトウ タダシ
Sz 1
540 Se 東京大学出版会//東京 \$d 1981(4)
Sp 275
Sb 0141
Sc 18 A2 XX1

左をデータベース化した例

- i) #125 BANGO D8101150000
A De Bary, Wm. Theodore/Bloom, Irene//ed.
A2 DE BARY, WM. THEODORE
A3 BLOOM, IRENE
B ED.
C 081X
C1 10A0XX1
C7 100000
C8 XX
D 1
E 1979
E2 Columbia Univ. Pr. //N. Y.
E3 COLUMBIA UNIV. PR.
O N. Y.
P 0
T 18, 537
T2 Principle and practicality: Essays in Neo-Confucianism and practical learning.
Z PRINCIPLE AND PRACTICALITY: ESSAYS IN NEO-CONFUCIANISM AND PRACTICAL LEARNING.
44

- ii) #86 BANGO D81003700000
A Dawson, Raymond
A2 DAWSON, RAYMOND
B 013X
C 11A1XX1
C1 110000
C7 XX
C8 1
D 1978
E Weidenfield & Nicolson//London
E2 WEIDENFIELD & NICOLSON
E3 LONDON
M 24 pls.
O 0
P 25, 318
T The Chinese experience. (History of Civilisation.)
T2 THE CHINESE EXPERIENCE. (HISTORY OF CIVILISATION.)
Z 4

- iii) #87 BANGO C81000800004
A Morgan, D. O.
A2 MORGAN, D. O.
B 013X
C 11BE2704
C1 110000
C7 70
C8 4
O 3
P 120-125
T The Mongol Expire: A review article.
T2 THE MONGOL EXPIRE: A REVIEW ARTICLE.
Z 4

- iv) #88 BANGO A81008700002
A 森 正夫
B 013X
C 11G17XX1
C7 XX
C8 1
F モリ マサオ
O 3
P 107-128
Q 氏変, 絹織物製造賃労働者
T 十七世紀初頭の「織備の変」をめぐる二、三の資料について
Z 1

- v) #89 BANGO A81006100001
A 斎藤 忠
B 0141
C 16A2XX1
C1 160000
C7 XX
C8 1
F サイトウ タダシ
O 3
P 1-21
T 古代朝鮮文化と日本文化とに見られる共通性と異質性
Z 1

- vi) #90 BANGO B81006500000
A 斎藤 忠
B 0141
C 18A2XX1
C1 180000
C7 XX
C8 1
D 1981(4)
E 東京大学出版会//東京
F サイトウ タダシ
O 0
P 275
T 古代朝鮮文化と日本
Z 1

冊子体化した例

- 0376 Principle and practicality: Essays in Neo-Confucianism and practical learning. De Bary, Wm. Theodore/Bloom, Irene ed. Columbia Univ. Pr. N. Y. 18, 537p. 1979
- 0301 The Chinese experience. (History of Civilisation.) Dawson, Raymond Weidenfield & Nicolson London 25, 318p. 24 pls. 1978 年
- 0032 The Mongol Expire: A review article. Morgan, D. O. 120-125p. BSOAS. 44 卷 1 号 1981 年
- 0269 十七世紀初頭の「織備の変」をめぐる二、三の資料について 森 正夫 107-128p. 名古屋大学文学部研究論集 80 1981 年 3 月 史学 27
- 0201 古代朝鮮文化と日本文化とに見られる共通性と異質性 斎藤 忠 1-21p. 三康文化研究所所報 16 1981 年 3 月
- 0168 古代朝鮮文化と日本 斎藤 忠 東京大学出版会 東京 275p. 1981 年 4 月
- 0162 Oriental philosophy. A Westerner's guide to Eastern thought. Hackett, Stuart The Univ. of Wisconsin Pr. Madison, Wisconsin 8, 242p. 1979 年 (REV.) Bishop, Donald H. 244-245p. PEW. 31 卷 2 号 1981 年

【注記】

- ①データシート採録例, 実際はカードに採録しているので, ここでは印刷の便宜上罫線で囲んだ。
- ②データシートをデータベース化した例, データベースに基づいて冊子体化した例, 実際は計算機によって出力しているが, ここでは印刷の便宜上活版組にした。

昭和56年度蔵書統計

(昭和57年3月末現在)

部局別	種別	昭和56年 増加数			累計		
		和書冊	洋書冊	合計冊	和書冊	洋書冊	合計冊
図書館	書	9,344	3,369	12,713	382,861	152,824	535,685
文学部	学	6,280	5,143	11,423	383,637	235,124	618,761
教育学部	学	2,206	1,354	3,560	42,385	36,514	78,899
法学部	学	3,836	4,635	8,471	186,880	247,705	434,585
経済学部	学	2,986	2,095	5,081	157,398	161,784	319,182
理学部	学	626	2,964	3,590	35,215	173,797	209,012
医学部	学	1,334	1,732	3,066	32,300	84,474	116,774
病院		91	145	236	11,435	21,628	33,063
薬学部	学	127	1,278	1,405	7,766	16,747	24,513
工学部	学	2,194	4,387	6,581	112,102	204,573	316,675
農学部	学	3,097	2,462	5,559	146,767	129,579	276,346
農場		39	2	41	1,053	105	1,158
演習林		245	55	300	7,257	2,721	9,978
教養部		7,658	7,673	15,331	220,118	175,260	395,378
化学研究所		136	811	947	7,016	25,453	32,469
人文科学研究所		8,783	2,086	10,869	324,401	44,586	368,987
結核胸部疾患研究所		146	137	283	1,844	2,785	4,629
原子エネルギー研究所		181	504	685	3,807	8,514	12,321
木材研究所		100	180	280	4,357	4,332	8,689
食糧科学研究所		157	379	536	3,378	7,119	10,497
防災研究所		254	773	1,027	6,847	13,377	20,224
ウィルス研究所		14	560	574	316	6,358	6,674
経済研究所		1,156	1,291	2,447	26,049	18,204	44,253
基礎物理学研究所		171	595	766	2,862	22,504	25,366
数理解析研究所		195	2,415	2,610	4,076	50,290	54,366
原子炉実験所		384	971	1,355	12,236	20,425	32,661
霊長類研究所		133	485	618	2,195	5,036	7,231
東南アジア研究センター		1,217	1,554	2,771	8,076	20,211	28,287
大型計算機センター		48	287	335	472	3,131	3,603
ヘリオトロン核融合研究センター		373	428	801	653	929	1,582
医療技術短期大学部		469	103	572	8,436	920	9,356
放射線生物研究センター		0	137	137	91	864	955
情報処理教育センター		3	8	11	215	268	483
医用高分子研究センター		26	33	59	36	33	69
環境保全センター		181	2	183	183	2	185
超高層電波研究センター		431	1,733	2,164	431	1,733	2,164
本部		57	7	64	5,089	566	5,655
合計		54,710	52,784	107,494	2,150,240	1,900,475	4,050,715

○本部：庶務・経理・施設・学生各部および保健診療所・保健管理センターを含む

京都大学附属図書館報「静脩」Vol.19, No.3 (通号74号) 1982年12月15日発行・編集：静脩編集委員会（責任者 附属図書館事務部長）発行：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電 大代751-2111(内線)2611~2643